8.「1937～1945年東亜同文書院の旅行に関する分析」

孫　　萍

葉　続きまして、交通大学校史研究室のお若い研究者です。1937～1945年の東亜同文書院の旅行に関する分析についてのご報告です。では孫萍さん、よろしくお願いいたします。

孫　尊敬する専門家の皆様、教授の皆様、ご報告者の皆様、こんにちは。本日、私の報告のテーマは「1937～1945年東亜同文書院の旅行に関する分析」です。

東亜同文書院の大旅行は重要な教育活動でした。また、この学校の特色でもありました。午前中、藤田先生、蘇先生もこのお話をされましたが、この活動は45年間続き、5000人余りの学生が参加、ルートは700余り、32部の旅行記録、数十億文字にわたる調査報告書があります。ですから、この旅行についての研究は重視すべき課題であると考えています。

では、三つの部分に分けてご報告申し上げます。一つ目は、中国の学術界の書院の旅行に対する研究と認識についてです。

中国学術界の東亜同文書院研究のスタートは比較的遅かったです。この大旅行についての研究もそれほど多くはありませんでした。ここ数年、一部の中国の学者がこの課題の意義に注目して研究を始めました。しかしながら、一次資料が比較的不足しているという難題に直面しました。

1998年、中国の学者の房建昌さんが、「档案与史学」の第5期に、「上海東亜同文書院、档案の発見およびその価値」という論文を発表されました。そこで初めて、中国国家図書館が東亜同文書院の1936～1943年にわたるすべての歴史資料を有していることがわかりました。これにはこの時期の旅行日記、調査報告書も含まれております。この課題研究を行う際、何回も中国国家図書館にまいりました。そして、これらの資料をぜひ見たいという希望をしたわけです。しかしながら、傷みがひどく、整理が行き届いていないということで、まだ開放されていない状況です。

このような状況の下、中国の学者は初歩的な研究をすでに始めております。学者によっては、この大旅行を研究の対象とし、専門的な紹介・研究をしています。また、書院もしくは近代日本の中国における文化事業の研究の中で、いわゆる大旅行についての分析、評価をしている方もいらっしゃいます。中国の学術界の、書院の大旅行に対する認識については、詳しく申し述べるのは差し控えたいと思います。

中国側の書院の旅行についての研究は始まったばかりです。ですから、埋めるべき空間はまだまだ大きい。さらに詳しく研究する必要があります。私自身は、1937～1945年の書院の旅行活動を研究の対象としています。理由の1つ目については、それについての研究はまだそれほど多くないこと、二つ目は、この旅行活動が交通大学の徐家匯キャンパスから出発したものであるからです。

第二の部分は、1937～1945年の旅行の概況についてです。この時期の旅行は続けて行われましたが、戦争を理由に、旅行の調査がきちんと行われなかった時期もあります。条件が許せば、毎期の学生の旅行日記を大旅行誌というかたちで公開発行していました。この時期に発行された旅行記録は5冊ありますが、比較的整ったかたちで、旅行期間、参加人数、旅行のグループ、方向について書かれています。

図にありますように、1937年、第34期の学生86人がこの旅行に参加し、28のグループに分かれました。この旅行記録は『嵐吹け吹け』という題名でした。それから、38年、35期の学生101人がこの旅行活動に参加しました。30のグルー

プに分かれました。旅行記録の名前は『靖亜行』でした。1939年、36期の学生106年が旅行に参加し、28のグループに分かれました。旅行記録の名前は『大旅行記』です。1941年、第38期の学生106人が31のグループに分かれて行われました。旅行記録は『大陸遍路』です。1942年、第39期の142人は38のグループに分かれて参加しました。旅行記録は『大陸紀行』です。

全体的に見て、5期にわたる学生541人が旅行に参加しました。ルートは全部で155、華北、華中、華南、いわゆる南洋地域にまで至っています。旅行調査の項目も非常に豊富なものでした。たとえば38期生106人の学生は、それぞれが一つの調査課題を抱えていました。地理、工業、商業、金融、財政、省の政治、県の政治、家族、教育、生活等々、11類106の項目に及んでいます。

39期の学生は38の調査グループに分かれていました。それぞれのグループは3～6人の学生から成っており、ともに一つの調査課題に携わりました。この38グループの調査課題ですが、一つ目は政治にかかわるものです。たとえば「中国の政治建設状況」、「純正国民党の政治力」、「省政と県政」、「華北特殊地域の調査」、「大東亜戦争の中国人と外国人に対する影響」、「外国政治、経済、文化権利と利益の調査」、「香港・マカオ、イギリス・ポルトガル植民政策の将来の発展展望」。二つ目は経済にかかわる調査課題です。たとえば「主要な都市の金融機関および通貨の現状」、「都市経済機能の分析」、「都市内の各経済組織の現状調査」、「郷鎮の配給組織」、「中国特産品工業調査」、「農村生産物出荷制度」、「占領地域間の経済関係」などです。三つ目は社会にかかわる調査課題です。「人口調査」、「新国民政府統治下の教育建設状況」、「道教の寺院を中心とした一般民衆の生活」、「北京語の補助動詞の研究」などでした。

第3の部分ですが、1937～1945年にわたる書院の旅行の新たな状況についてです。一つ目ですが、書院は学生の旅行調査についての指導がさらに規範化されるようになりました。学生調査大旅行指導室というものが設けられ、学生調査大旅行指導室規則というものもつくられました。指導室の中には指導主任1名を置き、指導教授若干名および助手若干名を置くと規定されました。

旅行前の数カ月、指導主任は各指導教授を通していろいろ協議を行い、その年の大旅行の調査地点、調査事項、調査方法について確定いたします。そして、学生旅行調査票というものをつくりました。学生が旅行に出発する前、指導教授は調査に携わる学生について、調査地域の予備知識、調査方法について、直接、学生に対して具体的な指導を行いました。学生の旅行が終わると、指導教授は学生に、一定の期間内に調査報告書と旅行日記各2部を提出するように要求しました。そして、それについて審査、整理、編集し、指導主任によってまとめられ、報告書となり、それが院長に提出されました。この表にあるのは、1937年、第34期生の旅行の手配日程です。ここからわかるのは、実際にどのように計画され、行われたかということです。

二つ目ですが、この旅行調査は、かなりの程度において、日本政府の政治目的に貢献しました。東亜同文書院の1937年に出された大旅行訓示の中にもこう書いてあります。学生の旅行を行う目的は、知識、精神を涵養するということ、そして東アジア社会の実情を自ら理解し、それについての深い理解を得ることです。もう一つは、質実剛健な精神、どんな困難に突き当たっても揺るがない精神をつくることでした。

日本の中国に対する侵略戦争が勃発してから、この旅行調査も戦争の渦に巻き込まれるのを避けることはできませんでした。以下の三つの面にそれが表れています。一つ目は、調査課題が日本の中国侵略機関の要求に基づいて行われたということです。東亜同文書院昭和13年度の年報にこう書かれています。第35期生の30の旅行グループの中で、南洋、タイ、マレーシア、フィリピン、

香港などの南方へ調査に行ったグループが4つ、華北・満州調査グループが6つ、そのほかの20グループが華中に行きました。華中調査に行ったグループは軍の特務部門との関係が深かった。そのような、書院独自の課題以外にも、軍の特務部門の委託を受けた調査も多かったわけです。

それから、『東亜同文書院大学史』によりますと、1940年第37期生の旅行は、時局の求めに応じて長江流域、海南島を主な調査範囲としました。そして、占領地域の商工業、中国在留日本人の居住状況、教育復興状況、外国人の権益状況、日本人の中国における発展状況、新政権の経済統制についてなどの調査グループが設けられました。

二つ目ですが、旅行活動が日本軍の許可の下に行われたということです。満州事変の後、国民政府は書院が旅行活動を行うことを支持しないようになり、1932年からは旅行の許可証を出さないようになりました。1937年6月、書院がいろいろな活動をした後、34期生は日本の総領事が発給し、中国の地方官が判を押した許可証を得るようになりました。その許可証には「中国の各官員は、この旅行証を持つものに対し保護を与え、礼を持ってそれに対し通行の便を与えるように」となっていました。1カ月後、日本の中国侵略戦争が全面的に勃発し、旅行活動は完全に日本の占領地域内に制限されるようになりました。そして、日本軍の指示、サポートを受けるようになったわけです。

1938年5月、書院は外務省の文化事業部に、4年生の中国内地調査旅行計画表というものを報告しています。この旅行が総領事および軍の了解を得たうえで、6月に計画通りに行うということを報告しています。1942年、第39期生の旅行の際には、中支派遣軍と、第7330部隊特務機関本部が発行した旅行通行許可証というものがありました。

この調査報告は日本の政府や軍に利用され、その中から多くの情報が得られました。学生の旅行調査報告は、参謀本部、外務省、農商務省など、日本政府の部門に報告されました。この時期もまた例外ではなく、1939年3月、書院の小竹文夫教授は、35期生の『靖亜行』の序の中で「この調査報告書の一部分は本院に残し、一部分は軍の特務部門に提出する。最近では外務省にも提出している」と書いています。日本のアジア歴史資料センター、外務省外交資料館蔵の資料の中に、いまでも書院が当時外務省の文化事業部に送った中国の調査報告書の文献がたくさん残っています。

この旅行調査は、戦争が原因で一定の制約を受けました。2005年8月9日、私どもは東京で当時の書院の学生を何名か訪問し、当時の旅行の状況についてお伺いいたしました。第36期生の藤田照男さんはこうおっしゃっています。藤田さんは1939年、広東に1カ月間旅行に行き、広東省の教育問題について調査をしましたが、戦争が原因で、もとの計画どおりに農村に行くことはかないませんでした。調査の前、まずは台湾図書館に行って資料を収集しました。調査報告の中の多くの内容は、実は資料から来たものであったということです。広東省で調査を行ったのち、天津、北京、ハルピンにもいらしたということでした。

第40期生の坂下雅章さんは、1942年にこの旅行に参加しました。3人の学生が1グループになりました。ルートは、山西省大同、太原、帰綏、包頭でした。調査課題は「包頭とモンゴルの往来、交易の状況、取引の状況」でした。

第41期生の工藤俊一さんは、1943年にこの旅行に参加しました。当時はそれほど遠いところには行けませんでした。江蘇省常州で1カ月余り調査をしました。調査の課題は、「地元の歴史・地理・経済と文化・風俗・習慣について」でした。旅行報告書をつくり、それを卒業論文として学校に提出しました。その後、ご自身で北京、長春などの地に旅行されたということです。

第41期生の高遠三郎さんは、中日関係が非常に緊張していたので、旅行も自由にはできません

でした。その範囲は日本側がコントロールしている地域に限られ、農村には視察に行けませんでした。当時、各地には日本人がたくさんいました。満鉄、民団の調査もありました。ある地に行くと、まずその先輩方を訪問し、地元の状況を理解しました。彼らからいろいろな経験を聞き、それによって調査報告書をつくりました。高遠さんが参加されたのは1943年の旅行で、1グループ3人、上海の崇明島に行き、綿花の買い取りの範囲・組織・方法について調査を行いました。日本のとある綿花買い取りの組織のサポートを受けました。そのあと太原、大同、ハルピン、潮州、済南、張家口、青島などの地に旅行されたということです。

第42期生の小崎昌業さんは本日会場にもいらしています。慣例により、本来なら1944年に旅行に参加するはずでしたが、戦争によって参加できませんでした。ですから、1942年、予科の2年生のとき、学校側の許可を得て、一人でこの旅行に行きました。そのときのルートは、青島、済南、石家庄、太原、離石、大同、北京でした。

これらの皆様方のお話からわかることは、この時期の書院の旅行というのは、戦争によりかなり制約を受けたということです。それは以下のいくつかの点に表れています。一つ目は、旅行の地域が日本の占領地域に限られていたことです。ですから、農村地域に行って視察することはできなかった。二つ目は、調査の期間が1カ月余りに縮小されていたことです。三つ目は、調査報告が地元の日本側の資料に基づいてつくられていたということです。ですから、実地調査の研究意義はかなり低くなっています。四つ目は、東亜同文書院大学の後期には、この旅行が途切れ途切れであり、正常には行われなかったということです。

歴史的に見て、この旅行活動は近代の中日関係の歴史の中でも非常に独特で複雑なものです。発端があり、変遷の過程があります。また、書院が置かれていた時代の影響も受けています。それぞれの時期に異なった特徴がありました。私ども研究者は事実に基づいた精神に基づき、この課題についてさらに深く、具体的、多角的に分析していかなければなりません。また、資料の収集も今後の研究の突破口となりましょう。ですから、さらに広く資料を収集することは、今後の研究にも非常に役立ちます。以上です。どうもありがとうございました。(拍手)

葉　どうもありがとうございました。何かご質問はありますでしょうか。ご質問のある方は挙手をお願いします。ないようでしたら、ここで休憩を取りたいと思います。

司会　それでは、午後の部の第1セッションをこれで終わらせていただきます。いま一度拍手をお願いいたします。(拍手)

葉先生、藤田先生、座長を務められた先生方、そして発表の先生方、フロアの先生方、皆様のご協力の下、非常に順調に会が進んできております。このセッションは15時10分に終了予定でしたが、現在おおむね10分早く推移しております。最終的に皆様からの質疑応答の時間がありますが、この時間を最初の予定より長く取らせていただいて、皆様からの質疑応答を多く受け付けたいと思います。休憩時間は当初予定20分ですが、この20分のまま実施します。ということは、現在より20分、15時20分から午後の第2のセッションを始めさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

展示室はまだ開いておりますので、まだご覧でない方はご見学ください。それから、1階のほうで出版物等を販売しておりますので、ご関心のある方はぜひ見ていただければと思います。それから、第3のセッションが終わりましたら懇親会がありますので、こちらのほうにも皆様ご参加いただければと思います。それでは、次のセッションは15時20分より実施いたしますので、よろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。